

◎中国 極端な宗教思想抑え込みへ

【NHK News Web、2014年5月27日】

<http://www3.nhk.or.jp/news/html/20140527/k10014747921000.html>

中国の新疆ウイグル自治区で多数の死傷者が出る事件が相次いでいることを受けて、中国共産党指導部は26日、会議を開き、社会の安定のために極端な宗教思想のまん延を抑え込む一方で、愛国心を養うための宗教教育は強化する方針を決め、少数民族への締めつけを一層強めるものとみられます。

中国国営の新華社通信によりますと、中国共産党の習近平指導部は26日、政治局会議で新疆ウイグル自治区の政策について検討しました。

自治区では先月30日、中心都市ウルムチの南駅で爆発事件があったのに続き、今月22日にもウルムチの朝市で爆発事件が起きるなど、多数の死傷者が出る事件が相次いでいます。

会議ではこうした現状について「分裂主義に反対する戦いが、長期化、複雑化、先鋭化し、社会の安定を守る重要性和緊迫性が強く認識されている」などと危機感が示されました。

そのうえで、今後、社会の安定を実現させるため、自治区にイスラム教を信じるウイグル族が多く住むことを念頭に、極端な宗教思想のまん延を抑え込み、民族の団結を促すことや愛国心を養うための宗教教育を強化する方針を決めました。

自治区では今月だけでも、極端な宗教思想を紹介する映像を広めるなどしたおよそ200人が、テロに関与する疑いがあるとして当局に拘束されたと伝えられていて、会議を受けて、ウイグル族に対する締めつけが一層強まるものとみられます。

☆関連するキーワード：信教（宗教）の自由、宗教政策、宗教教育

一神教間の基本的な教えの 相似と相違（2）

—— 偶像崇拜の禁止 ——

Overview

- 偶像崇拜の禁止
- 宗教美術に対する影響
- 国際政治に対する影響

偶像崇拜の禁止

- エジプト、古代オリエント世界における「**神の像**」(god's image) としての王（支配者）
- 像-王の政治神学
- 偶像崇拜の禁止（否定）は、この政治神学の否定に他ならない。
- 神は表現することができない（→ 政治と宗教の分離）。

あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。

（出エジプト記 20:4-5）

墮落して、自分のためにいかなる形の像も造ってはならない。男や女の形も、地上のいかなる獣の形も、空を飛ぶ翼のあるいかなる鳥の形も、地上を這ういかなる動物の形も、地下の海に住むいかなる魚の形も。また目を上げて天を仰ぎ、太陽、月、星といった天の万象を見て、これらに惑わされ、ひれ伏し仕えてはならない。それらは、あなたの神、主が天の下にいるすべての民に分け与えられたものである。しかし主はあなたたちを選び出し、鉄の炉であるエジプトから導き出し、今日のように御自分の嗣業の民とされた。

（申命記 4:16-20）

「神の像」としての人間

神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。

（創世記 1:26-27）

偶像崇拜の禁止が意味すること

- 神の代理表象（王、教会などの組織）の否定
 - 否定の程度は、同じ一神教内部においても違いがある。カトリックと正教会とプロテスタント、スンナ派とシーア派の違い。
 - 政治と宗教の分離 → practice（犠牲を捧げる儀礼）とbelief（内面的な信仰）の分離（ラビ・ユダヤ教、キリスト教） → 「宗教」概念の形成
- 世界の「脱魔術化」（disenchantment）＝自然の客体化
 - 西洋における、この自然観が近代科学の発展を促したと言われる。

宗教美術に対する影響

キリスト教美術の起源

- 偶像崇拜の禁止を聖書の伝統（ユダヤ教）から引き継ぐ。
 - 地中海世界では、神々や皇帝の像を作ることは一般的であった。
- 文字（聖書）を読むことのできない人々のための教育的なツールとして、教会で絵画が用いられるようになる。
- カトリック世界ではマリア信仰（マリア像）が広まる。

キリスト教美術の展開

- 西方教会
 - ローマ・カトリック教会：対抗宗教改革の中で美術を「近代化」
 - プロテスタント教会：カトリック的伝統（マリア信仰等）の否定・簡素化
- 東方教会：正教会
 - イコンを重視
 - イコン破壊運動（iconoclasm、8-9世紀）

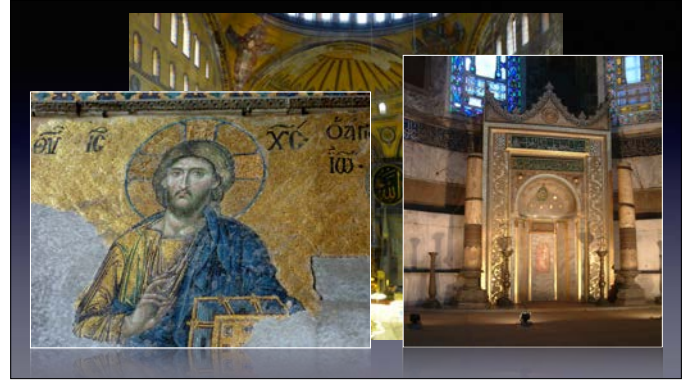
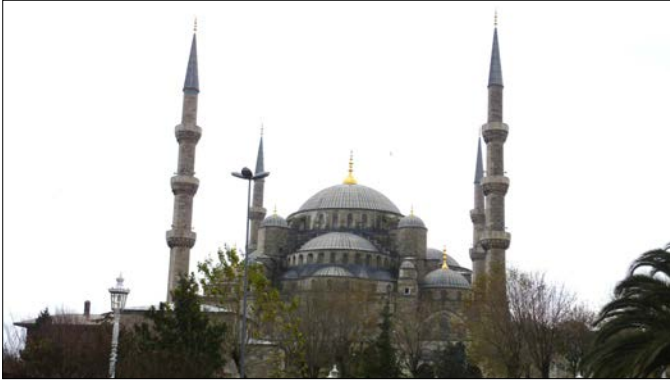
ダン・ブラウン最新刊『インフェルノ』（2013年。2015年、映画化予定）では、フィレンツェ、ヴェネツィア、イスタンブールを舞台として、ロバート・ラングドン教授（ハーバード大学、宗教象徴学）が、スリリングな物語展開の中で、数々の謎を解いていく。作品中には西洋美術や、その背景となるキリスト教、さらにはイスラームに関する多様な情報が「隠し味」として仕込まれている。



【88章】「この博物館は」ミルサットが説明した。「この聖域がさまざまな形で使われてきたことを訪問者に知っていただくために、アヤソフィアがバシリカ式聖堂だったころのキリスト教の図像と、モスクだったころのイスラーム教の図像を並べて展示しているんです」誇らしげに微笑む。「現実世界では宗教は対立していますが、象徴はかなりみごとに調和していると思いますよ。同意していただけますね、教授」

ラングドンは心から賛同してうなずいた。かつてここがモスクに変わったときには、キリスト教の図像はすべて水漆喰で塗りつぶされた。キリスト教の象徴が復元され、イスラーム教の象徴と並んでいる光景は、両者の図像の様式と感性が好対照をなすからこそ、見る者の心を奪う。

キリスト教は昔から神や聖人の忠実な描写を好むのに対し、イスラーム教は神の世界の美を飾り文字と幾何学模様で表現することに重きを置く。イスラーム教には、神のみが命を生み出せるとする伝統があり、それゆえ人が命あるものの像を作り出す余地はない——神だろうと、人間だろうと、さらには動物だろうと。



ラングドンは、かつてその考え方を学生たちに説明しようとしたときのことを思い出した。「たとえば、ミケランジェロがイスラム教徒だったら、システナ礼拝堂の天井に神の顔をけっして描かないだろう。代わりに、神の名を刻む。神の顔を描写するのは、冒瀆と見なされるはずだ」

つづけてその理由も述べた。「キリスト教もイスラム教も言語中心主義だ」学生たちに言う。「つまり、ことばをよりどころにしている。キリスト教の伝統では、ヨハネによる福音書において、ことばは肉体となった。一章十四節に“ことばは肉体となりてわれらのうちに宿りたまえり、とある。だから、ことばを人間の姿で描くことが許された。ところがイスラム教では、ことばは肉体とならなかったから、ことばのままに存在しているしかない……だから、たいいていの場合、イスラム教の聖なるものは名前だけが飾り文字で書き記されるというわけだ」



国際政治に対する影響

見えざる偶像崇拝

- ヘブライ語聖書
 - 異教の神々への礼拝をアヴォダー・ザーラー (Avodah Zarah) と呼び、目に見える偶像 (pesel) に限定していない。
- パウル・ティリッヒ
 - 偶像崇拝は、予備的関心を根源的関心にまで高めることである。本質的に制約を受けているものを無制約的なものと考え、本質的に部分的なものを普遍的なものにまで高め、本質的に有限なものに無限の意味を与える (現代の**宗教的民族主義**の偶像崇拝は最も良い例である) (ティリッヒ『組織神学』第1巻上、1955年 [原著1951年]、25頁)。

現代の偶像（1）

- タリバンによるバミヤンの仏像破壊（2001年3月12日）

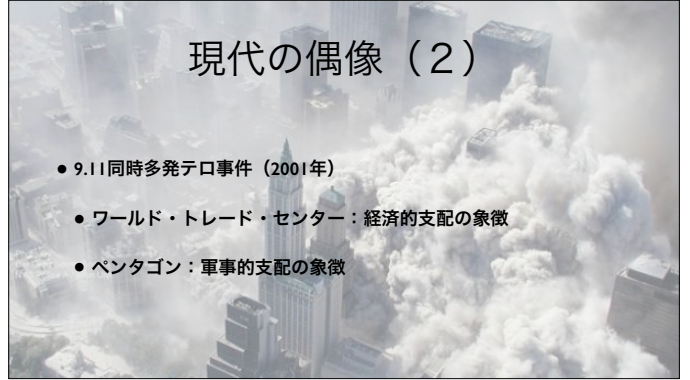
● 「私は、ヘラートの町の外れで、二万人もの男女や子供が、飢えて死んでいくのを目の当たりにした。彼らはもはや歩く気力もなく、皆が地面に倒れて、ただ死を待ただけだった。この大量死の原因は、アフガニスタンの最近の早魃である。同じ日に、国連の難民高等弁務官である日本人女性（緒方貞子）もこの二万人のもとを訪れ、世界は彼らの為に手を尽くすと約束した。三カ月後、この女性がアフガニスタンで餓死に直面している人々の数は百万人だと言うのを私は聞いた。

ついに私は、仏像は、誰が破壊したのでもないという結論に達した。仏像は、恥辱の為に崩れ落ちたのだ。アフガニスタンの虐げられた人々に対し世界がここまで無関心であることを恥じ、自らの偉大さなど何の足しにもならないと知って砕けたのだ。」（モフセン・マフマルバフ、後述参考文献）



現代の偶像（2）

- 9.11同時多発テロ事件（2001年）
- ワールド・トレード・センター：経済的支配の象徴
- ペンタゴン：軍事的支配の象徴



【参考文献】

- モッシュェ・ハルバートル、アヴィシャイ・マルガリート（大平章訳）『偶像崇拜——その禁止のメカニズム』、法政大学出版局、2007年。
- モフセン・マフマルバフ（武井みゆき、渡部良子訳）『アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない 恥辱のあまり崩れ落ちたのだ』現代企画室、2001年。